

漁師列伝

No.4

種苗生産から加工・販売まで手がけるナマコ漁師の心意気

北海道網走東部地区水産技術普及指導所 坂本 樹 則

斜里町は、北海道の北東端、世界遺産である知床半島のオホーツク海側にあります。地域の漁業はサケ・マス定置網が主体で、シロサケ、カラフトマスの水揚げが金額ベースで漁業全体（119億円；H21年）の90%以上を占めています。

室本康博さんは、15年ほど前まで、兄とともにサケ定置網漁業に従事していました。斜里沖は全道でも屈指の秋サケ漁場で、漁獲量は常に高水準であり、経営的にも安定していましたが、魚価は低く、とくに身質が劣るブナザケは雑魚並の価格でした。秋サケの低価格と秋サケ漁の単調な操業に物足りなさを感じていた室本さんは一念発起し、当時、斜里前浜では誰も操業していなかったナマコ桁網漁業に取り組む決心をしました。

当時のナマコの価格はキロ当たり350円程度と安く、漁獲対象種としては魅力のあるも

のではありませんでした。そこで、室本さんは桁網によって漁獲したナマコを干しナマコに加工し、付加価値を付けることで経営の安定を図ろうとしました。加工技術を道央の加工業者から学び、中国と取引のある神戸の業者を見つけて販売先としました。幸運にも、室本さんがナマコ漁を始めた頃から中国の目覚ましい経済発展に伴い、中国向け干しナマコの需要が急激に高まり、ナマコの価格が一時はキロ当たり5,000円になるなど急激に高騰しました。現在は、ナマコバブルもやや落ち着きキロ当たり2,500円程度となっていますが、ナマコの高価格により、始めて間もない頃の不安定な経営が徐々に軌道に乗ってきました。

室本さんはナマコ桁網漁業の他に天然ホヤ、天然ホタテ桁網漁を行っています。それぞれの漁業の主な漁期はホヤが4月、ホタテは5～6月、ナマコが7～8月です。ホヤは



室本さん所有の第八志帆丸（4.9トン）、ナマコ漁業を始める際に新造された。



2回の煮熟後に屋外で天日乾燥を始めたばかりのナマコ。乾燥期間は1ヶ月程度で生重量の4%程度になる。



加工場に併設されている店舗の前で奥さんとともに



人工採苗したナマコの幼生を検鏡している室本さん

ナマコの混獲物として少々、さらに天然ホタテの生産は全く獲れない年から100トン近く取れる年があるなど極めて不安定ですが、漁獲の中心であるナマコの漁獲量は、近年、年間10トン前後で比較的安定しています。室本さんは、今や9月以降は沖にはほとんど出ず、自分では漁獲しない秋サケの加工に専念しています。最近では鮭節の製造にも挑戦しており、トバなどの珍味加工を中心に秋サケの加工取扱量は年間50トン程度にもなっています。従業員は秋の加工最盛期で6人程です。

現在、斜里町にはウトロ漁協と斜里第一漁協の2漁協がありますが、ナマコ漁業には斜里第一漁協に所属する室本さんの桁網の他斜里第一漁協1隻とウトロ漁協2隻による潜水器漁業の計4経営体が従事しています。4隻による水揚げは平成21年度では27トン、9,400万円でした。

中国の需要の高まりによって価格が高騰したナマコは、今や経営の中心的位置にあり、今後も原料を安定して入手することが最大の課題です。そのため、潜水器業者とともに毎日操業日誌をつけ、漁協、水産指導所とその分析を行い、資源動向を監視しています。また、漁獲制限重量もおそらく全道で最も重い150g

以上とするなど、資源保護にも取り組んでいます。しかし、室本さんはそれだけではもの足りず、利用する資源は積極的な手段で守りたいとの気持ちで、昨年からは斜里町振興協議会の支援を受けながら人工種苗生産にも取り組み始めました。まだまだ技術は発展途上ですが、将来的には人工種苗放流によって少しでも資源の補填ができればと考えています。種苗放流から販売まで手がけるといふ、ナマコを中心とした新たなビジネスモデルを創出し、現在も常に進化し続けています。地域では極めて珍しいタイプの漁業経営者の心意気をこれからも応援していきたいものです。



ナマコ漁獲物調査の一コマ、毎年、ナマコ桁網の漁期終了後、指導所とともにこの調査では、通常の漁獲サイズより小さなナマコの発生状況を調査し、次年度以降の資源状況を確認している。